

研究ノート

在日百年のファミリー・ライフストーリー 河家の場合【第一部：渡日から「千里」創業まで】

猿 橋 順 子*

1. はじめに

東京渋谷と神奈川の中央林間を結ぶ東急田園都市線の、駒沢大学駅から駒沢公園や駒澤大学とは反対側、駒沢病院に面した通りを世田谷区役所方面に向かって歩き、上馬（かみうま）四丁目の交差点を右折、環状七号線に向かって閑静な住宅街を行くと、ほどなく「千里風チゲと家庭料理」と書かれた小さな看板が見えてくる。在日コリアン四世の河明樹（ハミヨンス）さん（1977 年生まれ）は、焼肉店「千里」の三代目オーナーシェフである。二代目は明樹さんの両親で、常連のお客さん達から「マスター」と慕われている父の河孝成（ハヒヨソン）さんと、厨房を仕切る母の崔英愛（チェヨンエ）さん（在日コリアン二世）である。焼肉店の「千里」は明樹さんが生まれる前、1965 年に明樹さんの祖父母で在日コリアン二世の河應烈さん（ハウソリョル）さんと崔順子（チェスンジャ）さん（在日コリアン一世）が開業した。

明樹さんは焼肉店の経営者であることに加え、もうひとつの顔をもっている。ソヘグム（小奚琴）という朝鮮民主主義人民共和国（以下、共和国と記す）の民族楽器の奏者である。ソヘグムは、朝鮮半島の伝統楽器のひとつであるヘグム（奚琴）を改良した弦楽器である。中国の二胡の仲間に分類されることもあるが、魂柱を立て、四本のスチール弦を張り、表情豊かな音色を奏でる。明樹さんは、かつて世田谷区三宿にあった東京朝鮮第八初級学校（小学校）の三年生の時にソヘグムと出会った。

* 青山学院大学国際政治経済学部教授

妻の尹慧瓊（ウンヘギョン）さんとの出会いもソヘグムが縁である。慧瓊さんは、宮城県仙台市にある東北朝鮮初中高級学校の初級部四年生の時にソヘグムを手にした。以来、ふたりはソヘグムを手放したことがない。東京と仙台、距離は隔たっていたものの、放課後の部活動、定期的に開催されるコンクール、そして高校生の時には平壤での短期留学¹⁾で仲間達と技を磨いた。ふたりとも高校卒業後は朝鮮大学校師範教育学部音楽科に進学した。大学卒業後は金剛山歌劇団²⁾に入団し、ソヘグム奏者として日本と世界の各地を仲間達とともにまわった。結婚後、明樹さんは十年、慧瓊さんは十二年間在籍した金剛山歌劇団を退団し、現在はフリーのソヘグム奏者として公演活動と後進の指導にあたっている。息子の侑臣（ユシン）くんも中学生³⁾の頃から学校の民族器楽部でソヘグムを演奏している。

2024年現在、高校生の侑臣くんは、河家の在日コリアンとしての世代でいえば五世となる。私が2021年の夏に、はじめて明樹さんに正式なインタビューをしたとき、「曾祖父が1925年4月1日に朝鮮半島の全羅道、光州から下関に上陸したという記録があります。私の先祖の日本での歴史がもうすぐ百年になります」という自己紹介のことばが印象的だった⁴⁾。明樹さんの曾祖父の河永俊（ハヨンジュン）さん（1989年生まれ）は、36歳の時、光州から日本に渡った。しかも、その時から現在まで、河家は、世田谷区上馬の同じ地所にずっと暮らしているのである。

以上が、河家が日本、東京世田谷に移り住んで百年、在日コリアンとして世代を繋いできた系譜の概略である。本稿は、河家の百年の来し方について「ファミリー・ライフストーリー」という手法（後述）を提案しながらまとめてい

1) 「通信教育」と呼ばれる音楽と舞踊の技術を高める留学制度。後に詳述する。

2) 共和国唯一の海外芸術団体で、在日本朝鮮人総連合会傘下の組織である。東京都小平市に本拠を置く。

3) 東京朝鮮中高級学校。

4) 猿橋順子（2022）「朝鮮芸能に携わる在日コリアンのライフヒストリー——技芸の研鑽・活動編」『青山国際政経論集』108, 223-245.

<https://www.sipec.aoyama.ac.jp/uploads/03/e0cf5c1b9d7b0d0cbc80805e9006a4245a6a4c9f.pdf> (238頁)。インタビュー実施日、2021年7月28日。

くものである。

2. 在日コリアン

1910年8月に調印・公布された「韓国併合に関する条約」から始まった日本による朝鮮半島の植民地支配は、第二次世界大戦の終結、日本の敗戦によって終わった。35年間におよぶ植民地支配の間、朝鮮半島の人びとは名目上、日本人とされた⁵⁾。この期間、朝鮮半島と日本列島の人びとの行き来も盛んになった。日本の敗戦による朝鮮半島の解放後、日本で暮らしていたおよそ200万人の朝鮮半島出身者のうち、多くは故郷に帰ったが、さまざまな事情で引き続き日本で暮らし続ける人びとがいた。米軍司令部（GHQ）の指導により昭和22（1947）年に外国人登録令が発布され、日本に暮らし続ける朝鮮半島出身者は登録を義務づけられた。そうして把握された人口は、およそ64万7千人と記録されている。

こうしてうまれたのが「在日朝鮮人」である。在日朝鮮人は、朝鮮半島の南北分断を受け、「在日韓国・朝鮮人」とされたり、北と南を言い分けない英語表現を借用して「在日コリアン」と言われたり、主に1980年代以降に日本を生活の地とするようになった外国人、いわゆる「ニューカマー」と区別して「オールドカマー」と呼ばれたりする。

こうした類型や呼称は、出入国管理法などの制度上の制約や、外交関係などから生じる社会的なイメージと関連して、ひとりひとりの生活に深くかかわってくる。ただし、だからといって、同じ呼称で括られる人びとの暮らしが、互いに似通ったものとなるはずはない。むしろ、それとは逆に、さまざまな法的地位や制度面の制約、主流派社会の根強い偏見や無関心さから生じる窮屈さがあるからこそ、ひとりひとりの思いやこだわり、ものごとの決断の背景、葛藤、人生の歩みの道程は、繊細かつ複雑なものとなり、差異がきわだつ。

5) 日本人（「内地人」）は日本列島と朝鮮半島の往来が自由だったのに対し、朝鮮人は渡日に際し渡航許可書の携行が必要とされるなど、さまざまな制約が朝鮮人には課せられていた。また、植民地支配の終わりを、ポツダム宣言の履行を定めた日本の降伏文書の調印式（1945年9月2日）とする場合、植民地支配期は36年とされることもある。

3. 在日コリアンのファミリー・ライフストーリーを編む

在日コリアンとして、日本社会で生きてきた家族の暮らしの歩みを記録することの意義は疑うべくもない。在日コリアンは、日本政府による朝鮮半島の植民地支配によって生まれた人びとであるから、1910年からその歴史が始まっていることになる。ということは、日本に暮らす在日コリアンのなかには、すでに「渡日百年」を迎えている家族もいれば、近い将来迎える家族もある。どれだけ意識化されているか、どれだけ具体的な記録が保存されているか、どれだけ口伝えに伝承されたストーリーをもっており、身体化された技や習慣があるか。そして、どれだけそれらを大切に思っているか、次世代に伝えたいと思っているか。これらのひとつひとつは、家族によっても、家族のなかの個人によつても千差万別、各人各様である。

既述のとおり、当初、私は「河家がもうすぐ渡日百年を迎える」ということを聞き、家族のみなさんに来し方を振り返るライフストーリーインタビュー⁶⁾を提案した。5人家族、ひとりひとりへのインタビューは、明樹さんが日程を調整し、準備を整えてくださり、「千里」の営業前や定休日の客席で実施することになった⁷⁾。

住居空間とつながっている店舗でインタビューをしていると、アルバムや手帳、書類などをすぐに確認することができる。家族のメンバーへの確認も、ひとこえ声を張り上げさえすれば可能である。また、そこには従業員、食材の配達人、近所づきあいをする人、同業者、常連客、親戚などが訪れる。訪れる人たちにインタビューの趣旨を伝えれば、人びとはごく自然に話の輪に加わった

-
- 6) 桜井（2002）によると、ライフストーリーインタビューは、クラックホーンらが、人類学におけるライフヒストリーの記録が、「『自伝』のように見えながら、じつは他者によって記録された『伝記』」になっており、「エスノセントリズムに陥っている感」（p.17）があることへの反省から出発した手法である。語り手が「経験した出来事や社会過程の主観的意味」（p.28）を把握することを主眼に置き、語り手とインタビューアの「共同作品」となることを展望する。対話的構築的アプローチを取る。桜井厚『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』（せりか書房、2002年）
 - 7) 研究倫理上の手続きとして、青山学院大学人を対象とする研究の審査を受けた上で、口頭および書面で研究の趣旨を説明し、「調査参加への同意書」を二通作成し交わしている。

り、河家とのつきあい、ご先祖様の思い出話などをしていく。このように、営業時間外の店舗空間は、河家の内と外を架橋する、まさに「縁側」のような場であった。

ライフストーリーインタビューにおいて、語られるストーリーは、聞き手と語り手の間の相互作用で生み出され、共同構築されていくものと位置づけられる⁸⁾。同時に、なれば開かれている営業時間外の店舗空間では、河家の人びとの、現在における外界の人びとの関係性やコミュニケーションに直に触れることにもなる。そこから触発されて、語りが生み出されることもある。さまざまな立場の人の参加と、それによって生まれる語りの活性化とリアリティは、インタビュー場面であることから生まれる特殊性というよりも、河家の住居区域と明確な敷居がない焼肉店の営業形態と、そこで実施されるインタビューであることによって生まれるものであると感じられた。

そこから、インタビューは、焼肉店営業（仕入れや開店準備、接客）や近所づきあい、友人との会食、演奏活動、お墓参りなど、家族の活動への参加と、その場での聞き取りを含めたエスノグラフィックなアプローチへと展開していく。そこには文字化のプロセスも関与している。「千里」を訪れる際、あるいは訪問に先がけて電子メールで、前回までのインタビュー記録を届けるようになっていた。不明瞭なところや、補足してほしいところなどを示すことで、関連する記録が探し出されて提示されたり、より詳しく知る人物を紹介されることが積み重ねられていった。つまり、インタビューだけではなく、この記録自体も相互作用の過程のなかで更新され、共同構築されて現在の形となっている。

4. ファミリー・ライフストーリーという手法およびジャンルの提案

では、このようにして制作された記録は、口述史もしくはライフストーリーのいずれに分類されるものといえるのだろうか。口述史とライフストーリーは、手法的にも内容的にも重複部が多くあり、ことさらに差異を強調する必要はない。

8) Atkinson, R. (1998) *The life story interview*. Sage (p.4, p.41). 桜井厚 (2002) 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房。

いとの意見もある。本稿の執筆においては、行政文書やアルバム写真、墓石を確認するなどして事実確認も丹念に行い、口述史、生活史、地域史のいずれにも与するようにつとめた。それでも、歴史的な貢献よりも、ライフストーリーとしての価値に重点をおくものと位置づけたい。それは、以下に示す四点を重視することを意味する。その四点は、本稿の構成にも直接的な影響をもたらしている。

第一に、一般的に口述史は、書かれた歴史の死角や欠落を補ったり、別の角度からの見方によって、歴史を立体的なものとすることに与する⁹⁾。端的に言えば、歴史のために口述史はある。本稿では、家族のライフストーリーを編む上で、すでに書かれている歴史を活用することを試みた。つまり、家族史をより深く、あるいは多角的に理解するための資源として、歴史を用いる立場を探究した。

第二に、百年を迎えるとする河家の人びとは、その家族の来し方を、今、どのように語るのかということに注目した。過去に起きた出来事は、語り継がれていくなかで、部分的に修正されたり、一部が忘却されたり、強調されたりして、すこしづつ形を変えていることだろう。それが現在においてどのような意味を帯びているのか。あるいは近い将来や、何世代も先を見通した未来に向かって、どのような意義や展望を携えるストーリーとして語られるのか、といった点に注意を払った。そのため、ライフストーリーの項目は、1925年に光州から渡日した河永俊さんの来歴を起点に、時系列に並べたものの、個々の項目内では、その出来事の語りから派生した近い過去の出来事、現在の状況、将来に向かってのストーリーなどにも関連付けられて展開する。その展開のしかたは、項目によってまちまちとなる。結果的に、ライフストーリー全体は、時間軸を不規則に行きつ戻りつしながら進んでいくかたちとなっている。

この、過去の出来事の現在における意味づけは、家族のメンバー、ひとりひとりによっても異なる。世代やライフステージが異なるのだから、むしろ差異

9) Tompson, P., & Bornat, J. (2017) *The voice of the past: Oral history* (4th ed.). Cambridge University Press.

があって当然である。こうした観点に立ち、出来事への意味づけや解釈をめぐる違いについて、修正したり、調整したりすべきギャップとして捉えるのではなく、個々の違いが生まれる背景に注目するよう心がけた。すなわち、第三点目として、違いを同居させる、多声性を備えた家族史のありようを模索しながら執筆した。

第四に、インタビューの場面には、聞き手である私がおり、私からの問い合わせに呼応することで形になっていく。インタビューの場に参加する人びとの相互協力によって語りは生成されていき、それは将来の関係にもつながる関係性の一過程として刻まれる。河家の人びとはインタビューの聞き手である日本人の私に何をどのように語り、それを受け取る私は、どこに注目してどのような記録化に取り組むのか。他方で、どれだけ対話を重ね、修正の提案を吟味したとしても、編集する者のフィルターを通したストーリーでもあることは免れ得ない。「河家在日百年のファミリー・ライフストーリー」と銘打つことは、また別の角度で編むこともできる、家族史のひとつのバージョンであるということに常に開かれている。

まとめると、ファミリー・ライフストーリーは、①家族史を深く理解し、広く拡張するための資源としての歴史の活用、②現在、もしくは未来・将来にとっての過去の出来事や物語の意味の探究、③家族構成員各人によって異なる意味づけの共存と、それが同居することについての解釈の探究、④調査者を含めた関係性への注目という四点を重視するものと位置づける。それにより、在日コリアンの家族史を編む新たな方法を提示するとともに、世代間で継承される価値や知恵、生活実践や文化的活動の意味を改めて見出すことに取り組むものである。

5. 河家について

本稿が取り上げる河家は、東京都世田谷区上馬で在日コリアンとして五世代にわたって同じ地所で暮らしてきた家族である（図1参照）。厳密に言えば、少なくとも2045年まで、日本のどこかの在日コリアン家庭が渡日百年を陰に

陽に迎えていくということになる。そして、すべての在日コリアンおよびそのルーツをもつ人が、その来し方を振り返り、その足跡を記録に残していくことに、等しく歴史的な意義がある。このことを確認した上で、本稿をまとめる上で、特に注目した河家の特徴とその意義を三点にまとめ、示しておきたい。

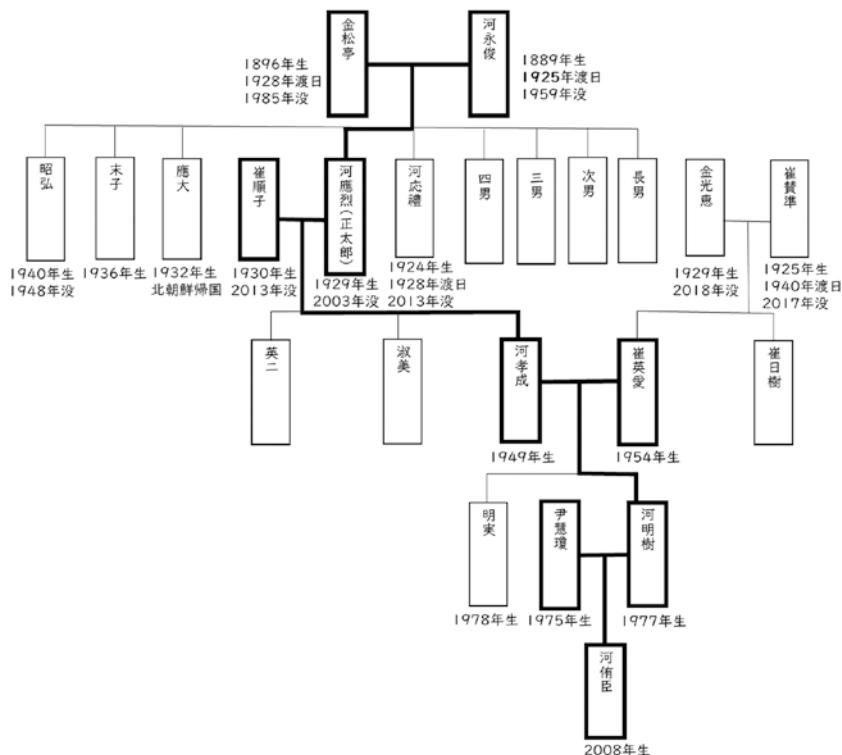


図1：河家の家系図

太線で示している方々が本編の主な登場人物である。

第一に、本節冒頭でも述べた「同じ地所に暮らしてきた」ということに注目する。これまで在日コリアンの生活文化に関しては、集住地域かそうでないかという点を区別して考える必要があると指摘されてきた。たとえば、山口県下関市の大坪、大阪府大阪市の生野区、京都府宇治市のウトロ地区、兵庫県神

戸市の長田区、東京都荒川区の三河島、神奈川県川崎市の桜本などは在日コリアンの集住地域として、活動の記録が蓄積されてきた。

同族の人びとが集まって暮らせば、共同作業や相互扶助が生まれる。だから、在日コリアンの生活史や文化史と言った場合、集住地域に暮らす人の声や活動は、相対的に記録に残りやすいことになる。他方で、それは、散らばって暮らしている在日コリアンからすると、「私たちにはあてはまらない」という見方や感想も生まれる。そればかりか、場合によっては、在日コリアンのライフスタイルのステレオタイプ化されたイメージの形成にもつながりかねない。だから、集住地域以外の場所で、点在して暮らす在日コリアンの「小さき声」についても丁寧に記録していく意義がある。

そして、河家の場合、集住地域に暮らす在日コリアンか、点在して暮らす在日コリアンかという二分法に収まらない歴史をもっている。河家が現在暮らしている地域は、かつては朝鮮半島出身者が集住していた。河家も、そのコミュニティの一員であったが、人びとが去っていき、一軒だけが残り、今は点在する在日コリアン家族になっている。1925年に世田谷の地に来た、孝成さんの祖父の河永俊さんは、コミュニティ形成の初期に渡日していると言ってほぼ間違いないだろう。河家は、在日コリアンのコミュニティが生まれ、途絶えていった過程のただなかで生活を営んできたのである。その家族の語りからは、都市部における在日朝鮮人集住地域の形成と解体¹⁰⁾の過程の体験者としての視座を含んでいる可能性がある。

第二に、ひとつの家族の来し方に密着することで、在日コリアンコミュニティと地域社会（世田谷）および日本社会、ひいては国際社会という社会的単位の重層的な関係性や社会的ネットワークの変遷と現在のありようを丁寧に記述

10) 後に詳述するところであるが、この地域については、何かの出来事によってコミュニティが解体させられたというよりは、さまざまな事情で緩やかに離散していった見える。そのような解体の過程を辿ったからこそ、歴史的に記録される機会を逸したという面も指摘できよう。そのように、緩やかな離散・解体を辿った集住地は、数多くあったことだろう。（金贊汀（1997）『在日コリアン百年史』（pp.216-218））それは記録される価値や意義がないということではないということを強調しておきたい。

することができる。先ほど、現在の河家を「点在して暮らす在日コリアン家族」と表現し、その点に注目すると述べたが、その暮らしあは決して孤立したものではない。むしろ、家族の来し方のストーリーは、教育、料理、音楽、それらに付随する用具や產品、メディアをきっかけに生まれるつながりによって、近隣地域社会から日本各地、朝鮮半島各地に、しっかりととした信頼関係のもとに展開されていくさまが見出される。

河家にとって、在日コリアンコミュニティのネットワークは、とりわけ密で強固であるものの、必ずしもそれだけにとどまらない。それは、河家が、自宅と同じ建物で、自営業として飲食店を営んでいることにも関係しているようにみえる。地域に開かれた焼肉店を六十年にわたって営む、ひとつの在日コリアン家族を取り巻く、社会的ネットワークの形成と変容の過程について、時代を追って、世代ごとに見ていくことに丁寧に取り組んでいく。

在日コリアンの研究は、植民地支配の歴史や、民族教育、南北の分断と統一への模索など、在日コリアンならではの課題に特化したものの比重が大きくなりがちである。しかし、五世代にわたる家族の生活史を基盤に据えて見ていくれば、在日コリアンコミュニティと地域社会、日本社会、国際社会の接合点がさまざまに見えてくる。それらの接合点に注目し、関係性を維持したり更新したりする営為を描き出すことは、在日コリアンコミュニティと日本社会との関係性はどのようにあったのか、ありうるのか、あるいはあるべきなのなどを考えることにもつながる。結果的に、私たちの生きる現在の社会において、異なる背景をもつ人びとの関係性を考えることにもつながっていくことだろう。

最後に、先に示したコミュニティ間の関係性への注目にも関連することとして、インタビューの語りに現れる語り手と登場人物間の関係性にも注意を払いながら記録することに取り組む。そうすることで、家族の伝承のありよう接近することができるのでないかと考えている。河家の「五世代にわたる系譜」というとき、それは男性（家父長制）を軸とした継承が前提としてイメージされがちである。しかし、家族の歴史が語られるとき、姑から嫁のように女性から女性へと伝えられたことがらや知恵、営みが少なくない。そこで、本論

では、誰が誰に対して、どのような機会に何を伝えたのかということに注意を払いながら記録に取り組む。

在日コリアンの生活史は、ややもすると「家庭内の生活文化の世代間継承は女性が担ってきた」といった単純な性役割論に落ち着きかねない。こうした固定観念に無自覚に陥ることがないよう、世代間継承のレパートリーを丁寧に記述することを心がける。親が子から学ぶということもおおいにある。生活文化はいつも言葉を伴うとは限らず、見よう見まねで身につけることもあるれば、知らず知らずのうちに受け継いでいることもある。どのような場面で何がどう伝えられたか、誰によって目撃され、どう語り継がれてきたのか。いつの間にか受け継いできたことに気づく瞬間はどのような時で、その発見にはどのような意味がともなっているのか。こうした家族内外の力動の局面を、語りと実践のなかから丁寧に見ていくことで、さまざまな世代間継承の形や要因に開かれる議論につなげていくことを展望する。

河家百年のファミリー・ライフストーリー

1. 河永俊さんと金松亭さんの渡日と解放前の暮らし

世田谷区が昭和 22 (1947) 年 9 月 13 日に発行した河永俊さんの外国人登録原票には、1889 年 4 月 22 日生まれ、1925 年 4 月 1 日に「朝鮮全羅南道光州郡芝山面 113 番地」から、「世田谷区上馬町 2 丁目 46 番地」に「人夫」として来たことが記録されている。この記録を、日本政府による植民地支配の歴史に沿わせてみると、河永俊さんは李氏朝鮮全羅道の光州に生まれ、21 歳で日本人とされ、36 歳の時に日本に渡り、20 年間世田谷の土地で生活を営み、56 歳で解放を迎えたということになる。以降、72 歳でこの世を去るまで、その半生を現在、孫家族が暮らし、一家の生計を支える焼肉店、「千里」がある世田谷区上馬で生きてきた。まさに半生を朝鮮半島で、半生を日本で暮らしてきたことになる。

丁寧に保管されてきた曾祖父の外国人登録原票を見せながら、明樹さんは、次のように話した。

明樹さん：この記録だけでは、ひいおじいちゃんが一番最初にどこにいたのかは定かではありませんが、「ずっとここで暮らしてきた」と聞いています。この家の裏が、今は遊歩道になっていますが、昔は蛇崩（じゃくずれ）川という川が流れています、川と密接な暮らしの話や、お店に来てくれた日本人のおばあさんが「覚えてますよ」と話してくれる話をつなぎあわせても、ずっとここで暮らしてたんだということが分かります。蛇崩川は暗渠になって今はいません（図 1）。ここは今、4 丁目なんですが、だから番地が違うのは、世田谷区の区画整理なんかが関係しているんじゃないかな。



図1：現在は暗渠、遊歩道となっている蛇崩川（2024年3月29日筆者撮影）

世田谷の沿革史を紐解くと¹¹⁾、確かに「千里」のある場所は、かつては上馬町2丁目で、昭和42（1967）年に上馬4丁目となったことが確認される。

三十代半ばで日本に渡った河永俊さんには光州で留守をまもる妻がいた。金松亭（キムソンジョン）さん（1896年10月3日生まれ）である。松亭さんは、1929年3月5日に下関に上陸し、世田谷に来たという記録がある。同じく1947年に発行された外国人登録原票の氏名欄には「河松亭」と書かれている。「役所で、日本式に夫の姓を書いたのでしょうか」という問い合わせに、明樹さんの母、英愛さんは以下のように話した。

英愛さん：日本のやり方に合わせて夫の姓を書いたのでしょうかね。本当の名前は金松亭（キムソンジョン）。でも、松亭という名前もね、昔は朝鮮の田舎では女の子が産まれてもろくに名前もつけないとか、よくあったと聞くじゃないですか。何番目の子とか、何月生まれの子と呼ぶとか。

11) 森安彦（監修）、三田義春（編著）『世田谷の地名——区域の沿革・地誌・地名の起源（下）』（東京都世田谷区教育委員会、1989年）。

そういうことだったみたい。以前、この（原票に書かれている）住所を頼りに行ってみたんです。新しい家が建っていて、そこに住んでいる人も何も知らない。その辺りに暮らしている人に、いろいろ聞いてみたけれど、河家のことを知っている人を見つけることはできませんでした。そうやってあちこち見て回っていたときに、「松亭」って地名を見つけてね。あ、そういうことかと思いました。日本に来るのに登録しなくちゃいけない、名前どうする、となったときに、暮らしていた土地の地名にしたのかなあと。そういえば、そんなことを（生前に）言ってたねと、そんな話をしました。

永俊さんと松亭さんが何年に、どのようなきさつで結婚したのかは分からぬ。しかし、日本に渡る前の光州で、小作農だった河家の暮らしはきわめて貧しかった。そのため、永俊さんが日本に働きに出ることになった。妻の松亭さんは夫の留守をまもっていたが、4人産んだ男児たちが、次々と栄養失調や病気で死んでしまう。ついに女児ひとりとなってしまった。このままでは家が絶えてしまう。舅は松亭さんに、日本で働く永俊さんの元に行くようにと命じた。

その時、5歳だった長女の応禮さん（1924年生まれ）が、1989年（当時65歳）に日本人女性の学びの場である「世田谷未知の会」に呼ばれ、講演した際の原稿が遺されている。そこには、以下のような記述がある¹²⁾。

当時、祖父母、両親がいくら働いても生活は貧しいばかりでした。

そして、他の朝鮮同胞もそうであったように、父は私達家族を残して職を求め日本へ渡って行きました。私が3歳の時でした。

日本に渡った父からは2～3か月に一度僅かな現金が送られてきましたが、祖父母は父がこのまま戻って来ないと男子は父1人なので河家の代

12) 河応禮さんの遺品のなかにあった手書きの講演原稿を見つけた嫁の丁照子さんが「忠実に書き起こし」、2021年5月16日に執り行った河応禮さんの八回忌の際に列席者に配布した遺稿「戦中、戦後を日本に生きて——65年間の人税をふり返り」からの抜粋である。

が途絶えてしまうと心配し、母と私を日本の父の所へ行かせてくれました。

3年後にはみんなで帰る約束で。

(中略)

父（永俊さん）は、土木関係の日雇いでその日暮らしでした。

母に連れられて幼い応禮さんがたどり着いた所は、今「千里」がある上馬の地所だった。

家族三人の暮らしが始まった翌年、松亭さんは男児を出産した。孝成さんの父、明樹さんの祖父にあたる應烈（ウンリョル）さん（1929年2月10日生まれ）である。「正太郎」（じょうたろう）と日本風の名前もつけられた。

実は、應烈さんの生年は、書類によって1929年と書かれていたり、1930年と書かれていたりする。1929年に松亭さんが日本に来たという前述の記録に照らせば、1930年生まれが正しいように思えるのだが、應烈さんは家族や近所に暮らすかつての同級生たちから「丑年」と記憶されていた。丑年は1929年である。その他の記録と照らし合わせても、1929年生まれが正確なのではないかと思われる。ということは松亭さんの渡日は、その前年の1928年だったのではないか。このような齟齬があるのは、外国人登録制度が、戦後、渡日の経緯を遡って行われたことや、日本社会と朝鮮社会、当時と現在では年齢の数え方が異なること¹³⁾などにもよると考えられる。

これまで、永俊さん・松亭さん夫婦が授かった男児は、みな亡くなってしまったため、應烈さんは、河家の長子として大切に育てられた。続いて、男の子を授かり、應大（ウンデ）と名づけられた。次に生まれた女児は、これで最後という意味を込めたのだろうか、末子（マルチャ）と名づけられた。ところが、その後も子宝に恵まれ、昭弘が誕生した。

13) 日本社会も朝鮮社会も、ふるくは数え年（出生時を1歳とし、元旦がくるたびに年を1つ加える）が用いられていた。両社会ともふたつの数え方が併存する時期があるが、日本では20世紀以降、満年齢がより一般的となる。朝鮮社会では数え年が長く維持された。2022年12月8日に満年齢に統一する法案が韓国国会を通過したというニュースは記憶に新しい。

永俊さんは「日雇い人夫」として、どんな仕事でも請け負っていたそうだ。河家では、永俊さんといえば、以下のエピソードが今も語り継がれている。

明樹さん：盗まれたものが戻ってくる。泥棒が盗んだ鍋や釜を返しに来たことがあるんだそうです。「『あの人から盗っちゃいけない』と怒られました」と謝りながら、返しに来たそうです。

このエピソードからは、真面目で誠実な人、近所の人たちから一目置かれている人、という永俊さんの人柄が見出される。

孝成さんは、祖父母や両親から故郷の話や植民地支配、戦争中の話はほとんど聞いたことがない。当時の暮らしの様子は、孝成さんが断片的に伝え聞いたことと記憶のなかの情景、アルバムのなかの写真をつなぎ合わせながら語られる。



図2：自宅にて（1949年頃）

前列 松亭さん、孫（長女、應禮さんの子）、永俊さん／後列 應大さん

日本生まれの應烈さんは、「正太郎君」として学区の学校に通っていたのだろう¹⁴⁾。近所に暮らす、同世代の人たちの接し方や話していた内容から、そう推察されるという。1945年、日本が敗戦を迎えたとき、應烈さんは16歳だったということになる。終戦後は、しばらくGHQに関連する仕事で、図面を描いていた時期があったとも聞いている。詳しい仕事の内容については分からぬのだが、戦後の混乱のなか、出来る仕事を探して家計を支えていたのではないか、と孝成さん、英愛さんは言う¹⁵⁾。

永俊さんには故郷の光州に弟がいたそうだが、子どもはいなかった。少なくとも世田谷に暮らす河家が知りうる範囲において、故郷の光州で河家は途絶えてしまったのだと言う。このようにしてつないできた一族の系譜だから、解放になったとき故郷の光州に帰るという選択をめぐって、永俊さん、松亭さん夫婦には大きな葛藤があったことだろう¹⁶⁾。結果的に、土地勘もあり、住処もあり、近所づきあいもある世田谷区上馬で暮らしていくことを選んだ。「ここに生活がありましたからね」と孝成さんは語りの節目にそう繰り返す。

周囲の同胞たちが、祖国の解放に沸き立ち、我さきにと船の出る下関に発つていくのを目のあたりにして、56歳の永俊さんと49歳の松亭さんは何を思つただろう。

2. 解放後の暮らし

解放後、日本に暮らす在日朝鮮人たちは、それぞれの地域に国語講習所をつくった。孝成さん、明樹さんの母校である東京朝鮮第八初級学校の『五十周年

-
- 14) 姉の応禮さんは、駒沢尋常高等小学校高等科卒業と遺稿に記されている。おそらく弟の應烈さんも同じ学校に通っていたのではないかと推測される。
 - 15) 同時代に、渋谷、世田谷を拠点にしていた画家達の口述史の中にも、連合国軍の米兵やその家族から仕事を請け負い、在日朝鮮人の友人達に紹介する人物がいたことが記録されている。詳細は明らかにされていない。白凜（2019）「在日朝鮮人美術家の知られざる足跡——戦後最初期の朝鮮人美術家の制作と活動を紐解く語り」『日本オーラル・ヒストリー研究』15: 91-108, 96頁。
 - 16) 1941年に18歳で結婚した長女の応禮さんは、さまざまなことをきっかけに何度も引っ越しをしているが、その経緯を記した後に「私たちは、祖国へ帰るつもりでしたから持ち家は必要なかったのです。」と結んでいる。

誌』には、その前身として1945年9月に上馬四丁目に最初の国語講習所が設立されたことが記録されている。その後、玉川（10月）、粕谷（10月）、北沢（11月）、渋谷（12月）、目黒（12月）に次々と講習所が開かれた。応禮さんの講演録には、「上馬では新興社という工場を借りて、玉川では見延山別院のお寺を借りて、あちこちで」開かれたと記録されている。このことからも、今、「千里」がある上馬町あたりに、在日朝鮮人の先導的で活発なコミュニティがあったことが確認できる。

間借りをしながらの教育であり、学校としての設備は整えられていなかつた。そこで、在日朝鮮人たちは資金を出し合い、自分たちの学校を建設する。1948年に三宿に校舎が完成し、各地の国語講習所は順次統合されていった。出来たばかりの東京朝鮮第八初級学校に集う子ども達の気持ちは、どれほど晴れやかだったことだろう¹⁷⁾。

永俊さんの子ども達も、電車通学で朝鮮学校に通い始めた。一家の、世田谷での生活は、光州での暮らしのように、死に直結するほどの餓えの苦しみはなくなった。しかし、戦後復興が急がれる都市の生活では、思いもよらない大事故に遭遇することもある。1948年11月19日、雨が降る日だった。昭弘くんが、学校から帰る途中、家の前の通りでトラックにはねられ、還らぬ人となつた。朝鮮初級学校の1年生だった。

幼い我が子を失い、嘆き悲しんだ松亭さんは、お祓い師をたずねた。お祓い師は「長男が結婚したら、その（亡くした）子にそっくりの男の子が生まれるよ」と告げたそうだ。その翌年（1949年）、應烈さんは松亭さんが探してきた崔順子（チェスンジャ）さんと結婚し、その年の暮れに男児を授かった。

英愛さん：それがこの方（孝成さん）。よく（昭弘さんに）似ていたそうですよ。

親孝行をするようにとの願いを込めて「孝成（ヒヨソン）」と名づけられた。

17) その翌年には、朝鮮学校閉鎖令が発令（1949年10月19日）されることになる。

このようなことがあったから、松亭さんはことのほか孫の孝成さんを溺愛したのだそうだ。

河家に嫁いだ崔順子（チェスンジャ）さんの来歴と、應烈さんと結婚するまでのいきさつについては、英愛さんが順子さんから聞いていた。



図3：河應烈さん、崔順子さんの結婚式（1949年）

英愛さん：お見合いしてね、3回目に会ったときはもう結婚式の時だったって。その年（1949年）の12月末にはこの人（孝成さん）が生まれてる。昔は女の人が忙しい。法事（チェサ）も毎月のようにあるから。長男（孝成さん）が生まれて、その年は暮れと正月にゆっくり寝ていられた、それだけが（よかった）って言ってましたね。全羅道で生まれたけど、幼い、10歳にもならない頃にお母さんが死んでしまって、父親に連れられて日本に来たそうです。（先に日本に来ていた）お兄さんを頼って若林（世田谷）に住んでいたんだけれど、そこにはもう子どもが6、

7人いて、その子たちの面倒を見るのがお義母さんの仕事。その家のお嫁さん（兄嫁）が酒豪で怖かったと聞いたことがある。その家族は北へ帰ってしまったそうだけど。だからおばあちゃん（順子さん）は学校も行かれなくて、読み書きもできなくて、日本語もあまり上手に話せなかった。本当によく働いた人。小さいときから苦労してね。・・・手が小さい人でした。

幼い頃から家のなかのたくさんの仕事と責任を一身に担った順子さん。「手が小さい人だった」という英愛さんの記憶のなかの印象が、ひとりの女性が背負っていたものの大ささを彷彿とさせる。

順子さんは近所でも評判の働き者だった。同郷（全羅道出身）であるということも、松亭さんにとって重要な条件のひとつだった。

英愛さん：昔の人は（出身の）道が違うと嫌うんですよ。全羅道は土地が平らで穀物がいっぱい取れる。海産物も豊富。美味しいものいっぱいもっているのに出さないとか。慶尚道の人はあんまりどうだとか。お互いにね。私、慶尚道なの。こっちは全羅道。

孝成さん：それでいつも喧嘩になる。

昔は出身地や、政治的な立場の違いで対立や諍いがあった。違いを際立たせ、譲り合うことや混じり合うことを避けていた。昔に比べると、今は恋愛も結婚も自由だ。違いを違いのまま認め合い、乗り越えて一緒に新しい何かを作り出す社会になりつつあるのではないか。孝成さんと英愛さんの夫婦は、なるべくそう信じたいし、自分たちも若い世代のそういう考え方や取り組みに対して、理解し、応援しようとつとめている。

孝成さんの記憶にある父（應烈さん）の職業はタクシー運転手だった。三宿の東京朝鮮第八初級学校のスクールバスの運転手もしていた。1940年代末から1950年代のはじめ頃、日本の大学に進学した弟（應大さん）と、妹（末子

さん）も一緒に暮らしていた。年老いた永俊さんと長男の應烈さんの収入だけで、大家族の家計を支えるのは難しかったのだろう。松亭さんは、当時、東京都が実施していた失業対策事業（通称、「ニコヨン」¹⁸⁾）にも行っていたが、それでも経済的に苦しかった。家計の足しにと、どぶろくをつくって売っていた。もちろん、「千里」が開業するずっと前のことである。

松亭さんのどぶろく造りは、孝成さんにとって鮮やかな記憶だ。家のどこに瓶が置かれていたかも鮮明に覚えている。

孝成さん：食べていくためにね、マッコリ（どぶろく）を（長屋の）中庭でつくってました。風呂場があってね、風呂場の着替える場所の下に瓶が置いてありました。風呂場ですから何かあったら流しちゃう。日本の学校の先生も飲みに来てましたよ。警察の人もね。それで（闇酒の取り締まりが）「今日来るよ」って教えてくれる。後ろは川だから全部流しちゃう。罰金の方が（原材料費より）高くつくからね。あれは美味しいもんですよ。子どもだったけど、飲んじゃってましたね。それで酔っ払ってね。あ、違う違う、麹を食べたんだ。麹だから酔っ払わない。酔っ払っていないないです。

孝成さんの語り方はユーモラスで、どこまでが本当で、どこからが冗談なのか、時々わからなくなる。ふざけているようで、油断していると真理を突いてくる。

18) 第二次世界大戦後の1948年末、日本の経済を安定させるために米国政府から「経済安定九原則」が指令された。ジョセフ・ドッヂが指導にあたったことから「ドッジ・ライン」として知られる。この緊縮財政政策により、失業者問題はむしろ深刻化することになった。そこで、日本政府は1949年5月に緊急失業対策法を成立させ、都道府県主導で公共事業などにおいて雇用を生み出すよう指示をした。東京都では公共土木事業に日雇で、最低賃金相当の日当をその場で支払った。当初の支給額が240円だったことから、大衆に広く「ニコヨン」と呼ばれるようになった。岩田正美（2017）『貧困の戦後史——貧困の「かたち」はどう変わったのか』筑摩書房。

加えて、この語りからは、應烈さんが「正太郎君」として、かつて日本の学校に通っていたであろうこと、学校の先生と河家の人たちが親しい関係にあったことも連想させる。警察官でさえ、どぶろくのうまみと、朝鮮人の食卓まわりに繰り広げられる人情にほだされるという話は、稀なこととはいえ「ある話」として他所でも聞くエピソードである。河家もまた、その土地の日本人社会と深く関わって暮らしていたことがうかがえる。

さらに、最近の出来事で、「千里」に来店した高齢の日本人女性が、明樹さんに「昔、どぶろくを分けてもらっていましたよ」と話してくれた。曾祖母がかつてどぶろくをつくっていたことは、もちろん話に聞いて知っていたが、来店したお客様から接客中に聞くと、急にそのことと今の「千里」がつながるような感じがした。

明樹さん：ひいおばあちゃんは、どぶろくと一緒に、一品二品、朝鮮風のおかずを出していたかもしれない。そう考えると、1965年創業の「千里」の歴史は、実際はもっとずっと古いのかもしれない。そんな風に想像してみると、なんだかわくわくしますね。

3. 孝成さんの幼少期から青年期

河家に嫁いだ順子さんにとってみれば、結婚したその年（1949年）に出産し、母となり、めまぐるしく生活環境が変化したことだろう。河家にとっては待望の跡継ぎの誕生である。

孝成さん：僕は可愛くて、甘えんぼうで弱虫。夜怖くてトイレに行けなかつた。トイレの廊下がみしみしうのが怖くてね。姉さん（叔母の末子さん）と一緒にについてもらっていました。みんなから可愛がられましたよ。いい子でしたからね。両親から怒られたって記憶がないなあ。怒られるのはいつも弟の方でしたね。父はタクシー運転手でしたが、車の運転が好きでね、あちこち連れて行ってもらいましたよ。



図4：孫の孝成さんを抱く永俊さん（1950年）

孝成さんの心の情景にある家の周りの様子は、朝鮮人も日本人も混ざって十世帯ほどが長屋で暮らしていた。

孝成さん：ここ（千里の前の道）から先は部落でね、全羅道の人たちが大勢暮らしていました。

家族の境目は緩やかで、頻繁に人の行き来があった。魚を焼いていれば、「いい匂いだね」と人が入ってくる。美味しそうな匂いがすればつられてのぞき込む。そういう近所づきあいをしている全羅道出身者の家が、「ここ（千里）から環七、当時は環七じゃない「改正道路」と呼ばれていましたけどね」と括るエリアだけでも、5、6軒は記憶にあると言う。結婚式も葬式も、地域のなかで助け合って行う。

孝成さん：昔はね、結婚した男の足をしばってメンタイ（干ダラ、ミョンテ）をムチのように使って叩くの。「うまいもの出せ」ってね。最初はおいしいものが出てこない。「出せ、出せ」って叩くと出てくる。男性が女装して花嫁に見立ててね。そういう、「遊び」ですよ。（世田谷の中里にも全羅道の人たちが固まって住んでいたから、何かあると集まって遊ぶの。昔からある風習でしょう。ほら、この写真。女装してるの近所のおじさん。この人はいつも決まって女装してましたね。縛られているのはアボジ（應烈さん）とオモニ（順子さん）。83年とあるから、弟の結婚式だな。若者は若者で遊ばせて、年寄りは年寄りで遊ぶ。

英愛さん：これはね、本来はお嫁さんのところでやるものなの。お婿さんになる人が縛られて叩かれる。お嫁さんになる人が止めに入る。でも叩くのを止めない。お嫁さんのお母さんが止めに入る。美味しいお酒やお料理を出して「これで許してあげてください」っておもてなしをするの。それがこれはお婿さんの家だから（本来はこれをやる場所ではない）。お父さんとお母さんを縛っちゃってるのは、ふざけてやっているんですよ。女装の人も、その止めに入るはずのお母さん役をふざけてやってるっていうわけ。

英愛さんが丁寧に説明してくれ、なるほど、と合点がいく。故郷でやっていた風習をそのままの形ではできないこともある。それでも遊びや余興として、自分たち流の「お決まり」を作り出して晴れの日をともに賑やかに楽しく祝う。

孝成さんは、小学校は三宿の東京朝鮮第八初級学校に玉電¹⁹⁾で通った。学校から帰ってくると、駄菓子屋に行ったり、近くの森でカブトムシやクワガタ獲りに夢中になった。ベーゴマでもよく遊んだ。ベーゴマを強くするために、

19) 1896年より多摩川で採取する砂利運搬を目的に着手された。1907年に玉川電気鉄道が旅客列車として渋谷—玉川間を走行した。昭和44（1969）年に廃業し、その代替としてバスの運行が始まり、現在に続いている。世田谷区立郷土資料館（編）（1989）『玉電——玉川電気鉄道と世田谷のあゆみ』。

玉電の線路に並べて置いておくのだそうだ。電車の車輪に轢かれたベーゴマはペチャンコになって、最強になるのだと言う。

虫取りをする森や林は、誰かの所有地なのだが、勝手に入って遊んでいると猛烈に怒り、追い払いにかかる人から、意に介さず遊ばせてくれる人まで色々だ。子ども達は冒険ながら、森や林に分け入っていく。昼間は朝鮮学校に通う孝成さんだったが、学校から帰れば朝鮮人も日本人もなく、興味や関心、流行りにのって、気持ちの赴くままに遊んだのだと振り返る。そういう子どもの遊び時間の思い出に、妹や弟の姿はない。一緒に遊んだのかどうか、子守を言いつけられたのかどうか……「遊んでないんじゃないかなあ」と、あまりおぼつかない。それなのに、「○○さんって、あそこの地主さんはおっかない」、「△△さんって、こっちの地主さんはやさしかったね」と、遊び場の自由度を左右する重要な情報の記憶については、いまもなお鮮やかだ。

鳥の捕獲や飼育にも夢中になった。スズメはお手製の罠で捕まえる。小学校高学年か中学生の頃、伝書鳩を飼うのが流行って、親にねだって買ってもらった。鶏小屋を作り、餌をやって大切に育て、大会に出す。いい鳩は顔つきが違う。見ればすぐに分かるのだと言う。だが値段も高い。何かと出費がかさむので、家の経済状況から考えて続けることはできなかったそうだ。他方で、スズメの捕獲については、友達のなかには捕まえたスズメを焼いて食べる子たちもいた。処理のしかたを教わったこと也有ったが、孝成さん自身は食べる気にはなれず、捕まえては放して楽しんだ。

東京朝鮮第八初級学校を卒業した孝成さんは、中学は目黒不動前にあった中級学校。高校は北区の十条にある高級学校へと進学した。高校からプラスバンド部に入った。ホルンを担当し、共和国への帰国船を見送りに新潟へ行ったこともある。

應烈さんの弟、孝成さんにとって叔父さんにあたる應大さんも共和国への帰

国の道を選んだひとりである²⁰⁾。應大さんは、朝鮮高級学校を卒業後、法政大学に進学した。應大さんは、日本の大学に通う際に、朝鮮人であることを周囲に隠していたそうだ。それでも共和国に帰国する道を選んだ。

孝成さん：（應大さんは）法政大学を出たんだけど、朝鮮人ということで就職がうまくいかなくて。日本にいる以上、町工場で働くしかないんだと。ここでは自分の力が発揮できないから、国に貢献するといって帰国を選びました。向こうで英語の先生になって、家族ももちました。金日成著作集が何十巻とあるんだけど、その英語訳が認められたそうです。

松亭さんはいつも應大さんのことを心配していた。松亭さんが他界した後になってしまったが、後に、明樹さんが音楽活動で平壤に行くようになり、元気に暮らしている様子がよく分かるようになった。行くたびに應大さん家族は、明樹さんを歓迎してくれた。

明樹さんが朝鮮語で挨拶をすると、叔父さんは日本語で応じたそうだ。そのことを振り返って明樹さんは「私の朝鮮語が伝わりにくかったのかもしれません」と言う。あるいは、應大さんにとって家族との会話は日本語だったから、明樹さんと日本語で話したかったのではないだろうか。大人どうしは、日本語が分かる者どうしであっても、日本から来た人の朝鮮語がたとえたどたどしくても、公共の場で日本語を使って会話することはめったにないのだそうだ。周りの人から、あらぬ警戒されないようにという配慮からなのではないかと英愛さんは考えている。相手が子どもだから、そうした懸念をする必要や心配がなく、應大さんは兄さんの孫である明樹さんに対して、親しみと懐かしさを込め

20) 應禮さんの遺稿（講演録）に以下のような記述がある。

「私の長男は1960年8月、17歳の時1人で帰国しました。

夫は、彼とちょうど同じ年の17歳の時1人で日本に来ました。

私の弟も1961年5月、日本の法政大学を卒業して間もなく帰国しました。

息子は祖国で高校、大学を卒業し設計技師になりました。

その後、祖国への往来の自由が実現し、毎年祖国訪問をしました。」

て、日本語を選択したのかもしれない。



図5：平壌の應大さんの自宅にて（1988年）
左から、應大さん、明樹さん、リュウ・ファヨンさん

2001年には、孝成さん・英愛さん夫婦も平壌に行く機会を得た。

孝成さん：親戚は埠頭で待っててくれて、感動的でした。叔父さん（應大さん）はもう亡くなっていました。奥さん（リュウ・ファヨンさん）と子ども達に会えました。

英愛さん：元気に暮らしていましたよ。おばあちゃん（松亭さん）は朝鮮に帰った息子のことをずっと心配して。そのことでも苦労しましたね。

しんみりとした空気を切り替えるように、孝成さんは珍道中の様子を面白おかしく話す。

孝成さん：そうそう、（私は旅行前に）前立腺がんの手術で入院してたの。退院したてで、一緒に行ったやつらが、荷物ぜーんぶ俺に持たせて、も

う、信じられない！「早く朝鮮の土を踏みたい」とか言って、私は手術後間もないのに、誰も待っててくれない。とんでもないやつだ。誰だ、あいつは！

「冗談ですよ」と傍らの夫を笑っていなしながら、旅の一場面は、英愛さんの記憶を鮮やかによみがえらせる。

英愛さん：友達みんなで行ったから。その時が私たちは初めてです。船で新潟から万景峰（マンギョンボン）号でね。私たちは店があるから長くいられなくて、ウラジオストック経由で先に帰ってきた。その時、初めて飛行機にも乗って。小さな飛行機。船の旅も楽しかった。あと、平壌冷麺が美味しくてね。素朴に作るから本当においしい。キムチも違う。夏に行つたんでキャベツのキムチが美味しかった。閉鎖された国だからかなあ、雰囲気がのどかだなあって思いましたね。

4. 「焼肉千里」開業 1965 年

焼肉店の「千里」は 1965 年に應烈さんと順子さんが開業した。應烈さん 36 歳、順子さん 35 歳の時である。開店の時に、店の前で松亭さんが記念撮影をした写真がある。1896 年生まれの松亭さんは 70 歳を前にしていた年ということになる。どこか緊張した、神妙な面持ちにも見える。

孝成さんは高校生だったから、焼肉店を開業することについて賛成も反対もなかった。将来、自分が継ぐことになるとは、当時は夢にも思っていなかった。今、改めてその時のことを思い返してみる。

孝成さん：両親が店を始めるとき、アボジ（父）は三宿の朝鮮学校のスクールバスの運転手。タクシーの運転手もしていましたけど、食べていけなかっただんでしょう。家族も多いし。ここ（今の千里）の駐車場のスペースに掘っ立て小屋みたいのを建てて、長椅子に 4 人ぐらい座れる。



図6：1965年「千里」開業 松亭さん

それからテーブル2個置いて。そこがいっぱいになったら住居を開放。奥に井戸があって、お勝手があったの。お勝手で飲んでる人たちもいました。

英愛さん：私が（結婚の）挨拶に来たとき、大きな赤提灯に「焼肉」って書いてあったのがすごく印象に残ってる。小さい赤提灯じゃないのよ。今時見ないような、おっきい提灯が下がっててね。小さなお店でしたけど、よくお客様が来ていましたね。もうその頃はどぶろくは作っていなかったと思う。おじいちゃんとおばあちゃん（應烈さんと順子さん）が始めた頃は、お昼もやってて餃子とか鯖の味噌煮とか、家庭料理ね。おばあちゃんが上手だった。お昼は夜が忙しくなったらやめたけど、しばらく「餃子ください」って来る人がいましたね。おばあちゃんは、お風呂

入るのもたいへんなぐらい。朝から晩までよく働いたって言ってた。

孝成さん：その時は肉といつても、カルビとロースとミノぐらいかなあ。ハラミなんていうのは、私たちの代から。

英愛さん：あれは関西の人たちがハラミが美味しいと言い出して探したの。

マスター（孝成さん）が45、6歳の頃からよ。その前は関西の人がホホ肉食べたいって言ったら、つらみってホホ肉探してみたり。その頃からアルコールも増やしてね。

英愛さんが「おっきい提灯」という時、手でぐるりと示して見せるその大きさは、高さ1メートルはゆうにあるサイズだ。

店の名前、「千里」は、應烈さんの姉、応禮さんの夫が考えた屋号だ。当時、共和国での経済発展を促進させるための千里馬運動（1957～61年）を受け、朝鮮総連でも「一日に千里を走る馬」千里馬がシンボルのように共有されていた。1964年には日本人と在日コリアン十名のスタッフによって、映画『チヨンリマ（千里馬）』が制作された²¹⁾。希望と発展の象徴であった。それにあやかるという気持ちがあったわけだが、「焼肉屋に馬は合わない」ということで「千里」に落ち着いた。

開店当時、十代で食べ盛りだった孝成さんは、家計の事情や店の営業よりも食べるほうが専門だった。カルビをはじめ、枝肉と呼ばれる赤みの肉は、高級品で家族の口には入らない。食べられるのは比較的廉価だった「ホルモン」（内臓肉）のみである。

孝成さん：レバーはどんぶりいっぱい食べてましたよ。どんぶりって言ったってね、ラーメンどんぶりですよ。レバーは牛より豚のほうがコリコリして美味しいんだなあ。今は食べられないんですけどね。ま、いいです。あの頃、私、一生分食べちゃった。

21) 小島晴則（2014）『幻の祖国に旅立った人々——北朝鮮帰国事業の記録』青木書房、336頁。

2012年から、食品衛生法の規定が強化され、多くの焼肉店にとって代表メニューだったレバ刺しやユッケがメニューから消えた。経済、畜産、自然災害、さまざまな事情や社会的な出来事や事件が、直接・間接の影響を与える。ひとつひとつ乗り越えて今日の「千里」がある。内臓肉は1965年の開業当初から、東京食肉市場の近くで昭和33（1958）年から営業している野口商店で仕入れている。「千里」の一年前に開業した京城館の店主（1964年創業）が紹介してくれた。仕入れは應烈さんが週に二回、欠かさず行っていたが、体を壊して行かれないと、京城館の従業員らが配達してくれ、助けてくれた。

「千里」が開業した1965年は孝成さんが高校生の時で、すなわちそれは大学進学を数年後に控えた時期でもあった。高校生だった孝成さんは「食べるほう専門」と笑い話を交えるが、大人になって、親になってみて当時のことを振り返ると、両親は子どもの教育費を捻出するために必死だったのだろうと想像される。應烈さんと順子さんは、焼肉屋を切り盛りして、三人の子ども達を大学まで行かせた。

英愛さん：私たちの親の世代はね、とにかく子ども達の教育には一生懸命でしたよ。自分たちは勉強ができなかったから。

それは、植民地期を経験した多くの在日コリアンに共通して語られる一面である。

料理は順子さんが腕を振るう。應烈さんはタレを担当する。加えて、ホールと外回り。閉店後の後片付け。明樹さんの記憶のなかにある祖父の姿は、朝から黙々と網を洗っている姿なのだそうだ。

英愛さん：昔の人（在日コリアン）は、女性がよく働く。男性は働かないっていう人もいるけど、おじいちゃん（應烈さん）はよく働いた人ね。

勤勉な毎日のなかにも、ちょっとした息抜きや気晴らしある。「千里」に

親戚や友人が遊びに来れば、閉店後は一緒に酒を飲み交わす。朝まで飲んでいたこともあった。應烈さんはビールが好きで「朝までビールを飲んでいられる人」だったそうだ。あるいは、仲間達との麻雀も楽しみのひとつだった。

孝成さん：夕方になるといなくなる。中里に雀荘があったんです。母が困ると「帰ってこい」と呼びに行く。

他方で、どう思い出そうとしても、順子さんが趣味といえるようなものを楽しんでいた姿が思い出せない。店の定休日に友達と出かけたという記憶もほとんどない。家のアルバムを見返してみて、民族団体（総連）の婦人会の慰安旅行に出かけた時のものと思われる集合写真が出てきた。同世代の女性達が並んで微笑んでいる。順子さんが30代半ばぐらい、千里を開業した数年後の頃だろうか。

晩年、順子さんは脳梗塞を数回繰り返し、左半身が動かなくなってしまった。それでも休むことなく、店に出続けた。

英愛さん：身体の具合が悪い時でも、上（上階の家族の居住部）で孫の面倒みてるより、厨房で盛りつけしたり。おじいちゃん亡くなつてからもお店のことをやってくれました。店にいるのが好きだったのかな。子守より仕事のほうが慣れていたのかもしれませんね。バイトも使わず、食洗機もない頃だから、営業が終わつてからずっと洗い物してくれる。

順子さんは幼くして母を亡くし、父と日本に渡り、甥や姪の子守や家事を担った。19歳で河家に嫁ぎ、その生涯をずっと家族を守り、支えることに捧げた人だった。

(つづく)